

みやびとひなび

村田昇

王朝の優秀な作家は、皆あがたあるき縣歩行の国守か、その子女であつて、地方のひなびる生活に接し、これと堂上貴族のみやびな生活を対照して批判する気ざし―機ざしが西暦一〇八六の院政である。院政とは

みやびとひなびの文化の分水嶺であつた。みやびとは、浪漫的・艶麗・都雅・典雅・風雅・風流・外飾・繊細・感傷・公卿・貴族・保守・重文・理智寛大・和・京都風である。ひなびは、現実・庶民的・田舎・素朴・疎大・武伐・斗争・内実・訂奇・飛躍・呪的・荒である。この二者が調和することは美であり、国家繁栄の哲理である。「記」「紀」の上で定着しなかつた帝都を、京都に定めた王朝人に、あづま・こし・みちのく・つくし等のひなびたいなかに対する誇りをもつた文化意識が高まつた。この意識の熾んな文芸は、あづまの語が現はれる伊勢物語である。十一世紀以前はみやびの上昇

斜面。西国の藤原純友の乱とはほ同時に起きた将門の乱は、平安のみやびの没落と、武士のひなびの出発点であつて、十二世紀はみやびとひなびの交替乱舞のステーション、十三世紀後は、ひなびとみやびが、混交して流れ行く処に、様々な様式が描かれている。みやびが、陰陽の中和した処に、善美が在るが、その中和は長くは続

かず、みやびとひなびの葛藤は、いつの時代―源氏物語時代にも在つた。源氏物語の煩惱は、藤氏と源氏の争いである。

これは来るべき院政の予兆である。平家物語は、鳥羽、後白河院政以後平家滅亡鎌倉開府に至る歴史的事実のステーションに、みやびとひなび離合の曲節であつた。中世において天皇を中心とする京都の公卿文化はみやび、鎌倉の武士文化はひなびであつた。中世の文化を動かした者は、僧・公卿・武士・庶民であつた。この四つの人群を平家物語を中心に考究してみる。

人間の自然に対する愛、人間性の無限なる完全化の能力に対する憧憬・主観に対する客観の優越である崇高が、高僧・聖の価値である。

この価値高き高僧、聖の多く輩出したことが、中世の特性であつた。その法然については、拙著「平家物語の仏教的精神」に、親鸞については仏教美学第二部大詩聖親鸞に、一遍については「中世文芸と仏教」に、一休については、「日本文芸の仏教的論究」に論究した。カッシーは、人間は社会生活を媒介しないかぎり自らを

見出すことはできず、自己の個性を知り得ない。といった。中世という大動乱期に生れた高僧は、悉く振幅の広い数奇な法難の生涯を終っている。平家物語には、高僧、性僧、奇僧、傑僧、政僧、軍僧がある。平家物語という池で、ひなびみやびの色彩様々な鯉が生れ育ち飛躍しているのである。三毒の煩惱に困り、兵戦を動かして、他分の生命・財産・権勢を侵害する修羅道となる。この煩惱を寂滅すべき聖職の僧が、兵となったのが中世の仏教界であった。白法隠滅の末法である。むべなるかな闇黒時代というのは、仏智の光明が照さないからである。文化とは闇黒を照らす光明によって発見されるものである。実相観入界である。戦記文芸・餓鬼・地獄・病草紙・方丈記・大経五悪段の厭離すべき穢土から、往生要集の欣求浄土互具の十界、十如是である。この世界を文芸を以て照らしたしたが、高僧、聖僧である。

平家物語巻一では、興福寺と延暦寺の無智な悪僧の空虚な争から延暦寺の僧兵が、興福寺の末寺清水寺を焼払うた惨事が語られ、「ここに興福寺の西金堂衆、観音房、勢至房とて聞えたる大悪僧二人ありけり。観音坊は、黒絲織の腹巻に白柄の長力釜短かにとり、勢至坊は萌黄緘の鎧著、黒漆の太太刀持つて」と源平の武士と同様な武装が語られてある。伝教大師が「アノクタラサンミヤクサンボダイの仏たちわが建つ杣に冥加あらせ給へ」と（新古今）に願はれた比叡山が、三百年後には、

賀茂川の水、雙六の賽、山法師、これぞ我が御心に叶はぬ物と、
白河の院も仰せらなりけるとかや。鳥羽の院の御時も越前の平泉
寺を山門へ寄せられける事は、当山を御帰依浅からざるによつて

なり。非を以て理とすと宣下せられてこそ、院宣をば下されければ江帥匡房の卿の申されしは、山門の大衆、日吉の神輿を陣頭へ振り奉つて訴訟を致さば、君はいかが御計らひ候ふべきと申されければ、法皇、げにも、山門の訴訟は黙止し難しとぞ仰せける。（巻一、願立）

と修羅道に墜落した因は、叡山大学の建学精神ともいうべき仏教の「山家学生式」「国宝トハ何物ゾ、宝トハ道心也。道人有ル人ヲ国宝ト為ス」という崇高なる理想を失った驕慢の故である。道心とは精神的英雄精神である。権勢利欲の勝利者ではない。

天台座主明雲大僧正は、大納言顕通の子として、顕密兼学して、浄行持律の上、大乘妙経を公家に授け、菩薩浄戒を法皇に保たせ奉る御経の師、御戒の師、まことに無雙の碩徳、天下第一の高僧であったが、叡山僧兵の皇家に対する乱暴の責任者としての罪で、伊豆に配流された。（巻二）これに対する僧兵共の怒りの声に「夫れわが山は日本無雙の靈地、鎮護国家の道場、山王の御威光盛んにして仏法王法牛角なり。……帝都の鬼門に峙ちて、護國の靈地なり」とある。これを徒然草の百四六段の明雲座主についての記事、二二六段の「信濃前司行長入通、平家物語を作りて、生仏といひける盲目に教へて語らせけり。さて山門の事を、殊にゆゆしく書けり」と全巻に亘り次々に堂々と書かれた山門に関する記事と並に、山岡孝雄先生の平家物語作者考を勘考して、殊にゆゆしく書けりの意味する処は、重要である。さて明雲は赦されて再び座主となったが、寿永二年秋義仲が、後白河法皇を法性寺に攻めた時、流矢にあたって非業の死を遂げた。天台座主を戦死させたことは、正しく五逆罪で

ある。かかる社会を造った者は清盛である。その罰で地獄の苦しみをえて死に、一門も悉く滅んだのである。明雲事件に關係して活動した僧に、澄憲がある。澄憲は加賀守藤原實兼の子は出家して少納言信西と称した者の子である。後白河法皇を中心とした平家を亡す鹿の谷の密謀に参与している。承安四年権大僧都になった。(玉葉) 平家物語卷一に、「祇園の別当権大僧都澄憲に仰せて、秉燭に及んで、祇園の社へ入れ奉らる。」とあることは、百鍊抄、愚昧記にも見られる。子に安居院の聖覚がいて、法然の弟子。源氏物語表白を書いた。「説話索引」には、

澄憲 亡妻の現身の夫の家に帰るといふ事を人に語る(発心五・九四)

炎旱の時、竜神に祈りて雨を降らす(古事三・七二)(著聞二・三八五・大系九六)

平座論義の作法を知るとて、基房(松殿)に寝めらる(古事三・七三)

祈雨の勸賞に、上蘆覚長を超えて権大僧都となる(著聞二・三八五・大系九六)

祈雨に依り権大僧都となるを俊恵、歌を詠じて祝ふ(著聞二・三八五・大系九六)

——法印、春日大明神の託宣に依り五部大乘経供養のため奈良に赴く(著聞一二・六一四・大系三四二)

奈良坂にて山賊を教化す(著聞一二・六一四・大系三四二)

父信西の十三年の仏事を営む(沙石九上・三五八・大系四一一)

聖覚と二人、能説の名あり(井蛙六・七一)

日本文芸史論 みやびとひなび

と出ている。

卷二の明雲流罪事件の源流は、卷一の額打論・清水炎上・鶴川合戦・願立、御輿振、内裏炎上とうちつづき、要するに僧兵の乱暴である。叡山の僧兵ではなかったが、明雲事件の主役を演じ政僧、傑僧ともいふべき活動をして、悲劇の生涯を終った西光がいる。「鶴川合戦」に、

師光は入通信西に召使はれ、阿波に生れ宿根賤しい下郎なりしかど、賢かったので後白河法皇から愛され、左衛門の輓負の尉になされ、出家して西光と称した。

が、始縱清盛の専横を憎み抵抗した不屈の人物で、鹿の谷事件で捕えられた時、清盛に向って、「ちとも色も変せず、悪びれたる気色もなく」

御辺は故刑部卿忠盛の子で坐しか共、十四五までは出仕もし給はず、故中御門藤中納言家成卿の辺に立入給ひしをば、京童部は高平太とこそ言しか。保延の比、大將軍承り海賊の張本三十餘人、擲進せられたりし賞に四品して、四位の兵衛佐と申ししをだに、過分とこそ時の人々は申合はれしか。殿上の交をだに嫌はれし人の子孫にて太政大臣迄なりあがりたるや過分なるらむ。侍品の者の、受領檢非違使に成る事、先例傍例なきに非ず。なじかは過分なるべき。

と罵り返している。一世紀前の撰関政治の時代には、田舎の在庁官人の出身の者が、中央の政治に参画するなどということは、夢にも考えられなかったことである。院政という新しい政治の形態は、西

光のような骨の強いひなびた者を中央にひきあげ、陰謀と術致と内戦の官延生活の中で鍛えあげた。西光と同じ運命を歩んだ僧に俊寛がいた。鹿の谷に平家討滅の謀を企て、それが発見されて清盛の為に鬼界が鳥に流され、そのままここに憤死する。

その悲劇を平家物語は「足摺」と題して語っており、世阿弥は、「俊寛」の曲を作っている。類稀な悲劇人物である。巻一の「頼豪」章は、有験の僧頼豪阿闍梨は、白河法皇の命で、皇后の皇子誕生を祈って成就した報賞に、三井寺戒壇建立を奏請したが、法皇は拒絶したので、頼豪は皇子を祈り殺し、自分も干死した。これは俊寛と合せて怨霊の怖しさを語っているのである。後白河法皇の第二皇子所以王に、平家討伐の謀叛事件は、三井寺と延暦寺と興福寺間の僧兵の斗争に拡大して、武士に交って斗う勇猛な僧が、つらね語られている。所以王に討伐を勧めた入道頼政も、悲痛な敗死を遂げた。所以王も敗死し、その若官も宗盛の命乞で出家した。出家の命乞が敵を欺く術であったことは、牛若丸等の例が多い。「さて所以王の謀叛に興福寺、三井寺が組したこと穏便ならずとして、知盛忠度が攻めた。寺の僧兵も一千人、甲の緒を締め、搔楯搔き、逆茂木引いて対戦し、夜に入りて平軍が火を放った。頭密須叟に亡びて伽藍更に跡なし。かかる天下の乱れ、国土の騒ぎ、只事とも覚ええず平家の世の末になりぬる先表やらん」とぞ結んでいる。(巻四・三井寺炎上)

抑々良源が天台座主になった康保三(九六六)の頃の叡山は、紀綱乱れ、山内で飲酒、私刑が行はれ、法会では儀式より饗応が主となり、大金を投じて贅沢を競う奢侈の風が著しく、一部の僧侶はた

だ名譽のみを求め、学問、修業に真剣味が失なわれ、布で頭を包み、刀杖を腰にたばさんだ悪僧が、党を結び群を成して山上を横行した。良源はこれを粛清したが、叡山の繁栄を期するあまり、莊園を多数獲得し、そのため叡山の門閥化、世俗化を急速に招くこととなった。教団の世俗化は叡山に動搖をひきおこし、山内が慈覚大師系(山門派)と、智証大師系(後に山を下り三井の園城寺の寺門派)とに对立抗争することになった。叡山に入山して仏教のいう四種三昧は修行できず、国宝となって、救世度衆生も不可能である。山は俗界であるから、山を出ることが通世であった。王位を捨てた釈尊の如く、虚栄の俗界の名声に背を向けて、素朴な求菩提を進んだのが、源信、法然、親鸞、増賀、教信、性空、空也、一遍、日蓮等であった。

巻五に、文覚と申すは、渡辺の遠藤左近の將監茂遠が子に、遠藤武者盛遠とて、上西門院の衆なり。然るに十九の年、道心発し、髪切り」とある。発心の動機は、盛衰記巻十九「文覚発心附東歸節女事」に、袈裟という恋人に対する源渡という武士との恋の争から、寔に案外にも女を殺害した悲劇から宗教的決断をして、転向して真言僧となる。これを芥川龍之介は「袈裟と盛遠」に作っている。その後那智に千日籠り、大峯三度、葛城二度、高野、粉河、金峯山、立山、富士の嵩、伊豆、箱根、信濃戸隠、出羽羽黒、惣じて日本国残る所無く行ひまわり、飛ぶ鳥をも祈り落す程のやいばの験者と成って京都へ帰ってきた。修験道の行者山伏は山武士でもあると自負していたと思はれる。仏道の武士道としてのひなびの体験、実行者である。この山嶽縦走家が、京都のみやびを深山幽谷に運んだので

ある。

日本一の大滝を背景に、大聖不動明王の乗りうつった剛情我慢の傑僧文覚が、肝胆を砕いて修行する姿は、凄愴、勇壯である。運慶の彫刻を思はせる。かかるあらび飛躍が無かつたら中世の歴史は展開しなかつたのである。源信、法然等の聖は菩薩である。菩薩とは利他的創造精神の英雄である。その行動様式には、政治、陰謀、陰謀型。西行、空也、一遍の如き漂泊型。行賀、教信、長明恵惠の如き隠棲型。法然、親鸞の如き専修念仏型がある。共通性は超俗的に王朝的のみやびの感傷的あはれを解脱し、感傷のあはれが慈悲のあはれに転化していることであつて、中世が生んだ古典人間である。帰洛した文覚は、法皇庁に出頭し、高尾の神護寺の修造を、暴力によって勸進を強請した簾で、禁獄され、更に伊豆へ遠流された。途中の海上で暴風に遭うたが、龍神の加護で難をのがれた。伊豆では頼朝に父義朝の體體を示し、後白河院から賜つた平氏討伐の院宣を渡し、拳兵を勧め実現させた類稀るスケールの巨大の黒衣の策動家である。文覚は一度目は、法性寺強訴によって伊豆へ(平家物語巻五)。二度目は、佐渡へ(東寺長者補任)。三度目は対島へ(延慶本平家物語)と計三回流罪されている。弟子は上覚は故人上御房(文覚)は命を捨てさせ給ひて、後白河法皇に参りて高雄興隆のこと申させ給ひ候ひしにも、始終たがはず道理を通さんとて、伊豆の国に配流候ひき。さて、その道理通り候ふしるしには、東寺、高雄の礎かくなされ候ひにき。その後佐渡の国配流次に対島国に配流、終りに鎮西に御逝去。鎮西配流のたびは、法師ばら逃げ帰る候間、御房達御興をかき、馬に付して草を刈り荷

日本文芸史論 みやびとひなび

を持ち、鎮西に於いては朝に遠山に入りて薪を、夕にはもちつれて冬かへらせ給ふをば、見る者皆随喜し給ひけり。(神護寺文書)と誌している。神護寺の川向ひの高山寺華嚴宗を復興した一生不犯の聖僧明恵上人は、文覚の愛弟子であつた。若き日恋に狂つて女を殺害した文覚は、やがて後白河院、頼朝という巨人を操つて歴史を転回させた。人間の可能性を自由に活動させる仏道の摩訶不思議である。

その他平家物語に登場する僧侶には、慈慧僧正(巻六)、良防(巻七)、湛豪(巻十一)、土佐房(巻十二)、弁慶(巻十二)、法然(巻十、巻十一、盛衰記三十九重衡請法然房事)がある。平家物語は未知的な叙事詩であるが、抒情性を加味しているのは、音楽を重んずる法然の浄土教が世界觀となつてゐることも一つの因である。法然の浄土教と平家物語については、福井康順氏の詳しい研究が成されている。法然は下層庶民、罪重き人々の濟度に尽力した。上求菩提、下化衆生、往相即還相の実行者であつた高僧であつた。これは即ち辺土の群類に仏教で教化した、ひなびとみやびを調和したことである。乱世のあらび心を柔和忍辱にしたのである。これを端的に証することは、承元元年七十五才土佐に流罪の時に、流刑さらにうらみとすべからず。そのゆへは、齡すでに八句にせまりぬ。たとひ師弟おなじみやこに住すとも、娑婆の離別はちかきにあるべし。たとひ山海をへだつとも、浄土の再会、なんぞうたがはん。又いとふといへども、存するは人の身なり。おしむといへども、死する人のいのちなり。なんぞしかならずしも、とこるによらんや。しかのみならず、念仏の興行にして年ひさし。辺

鄙におもひきて、田夫野人をすゝめんこと、本来の本意なり。しかれども、時いたらずして、素意いまだはたさず。いま事の縁によりて、年来の本意をとぐる事、すこぶる朝意ともいふべし。此の法の弘通は、人とどめんとすとも、法さらにとどまるべからず云々(新編和法然上人全集)といったことばである。戦場に露命を賭け人の命を殺す罪業重き武士、山野に伏し馬を馳せる武士、生きる糧を求めて奔走する民百姓には、道長の法成寺や頼通の平等院の如き華麗な金堂を建立する資材もなく、仏陀を観念する閑日月も無い。これら衆生の涅槃は、撰撰本願の唯称南無阿弥陀仏である。

盛衰記卷三十九には、南都を焼いた極悪の重衡を、臨終に招かれた法然は、

一声称念佛皆除と釈して、一声も彌陀を唱れば、過現の罪皆のぞかる。故に南無阿弥陀仏と申一念の間に、よく八十億劫之生死の罪を滅す、馮ても憑むべきは五劫恩惟の本願、念じても念すべきは、此彌陀の名號也。行住坐臥を嫌ねば、四儀の称念に煩なく、時所諸縁を論ぜねば、散乱の衆生に據あり、下品下生の五選の人と称して、己に遂々往生、末代末世の重罪の輩も、唱へば必可、預々来迎、是を他力の本願と名。

引導説法している。これは平家物語では卷十戒文に、法然の九巻伝では卷二の上に語られている。

後白河法皇は、藤原政権による律令政治と、武士、庶民の活動し始めた院政時代の交替期に、間色で保護色させられ三十余年の長きに亘り、院政の座を守りつづけた老獪無比な怪物である。武力を用いずして、清盛、頼朝という大將軍を自由に操縦した力は、天皇と

法皇、神と仏の現し身であるのか、歴史的環境か、個性か。これらの総合である。曖昧茫然。新古今に「春の夜の夢の浮橋とだへして嶺にわかるる横雲の空」とある。夢の浮橋は中世美の象徴であり、新古今集美の象徴であり、後白河法皇の人格であり、文楽の黒子の如き処世態度であった。白河、鳥羽、後白河、後鳥羽と続いた院政は、保守と改新、皇室と藤原貴族と源平武士、みやびとひなびのどつちづかぬ過渡期であったから、後白河法皇の如き、保守と改新性を兼備した夢の浮橋的人物が、政治や文化を牛耳るには適任であった。彼は平治の乱が終って、平氏が権勢を執った平治元年に法皇位に即き、平家物語卷十二に、「平家の子孫は長く絶えにけり」(六代斬られ)と語られた文治九年六六才で姿を消している。この年法然の「選釈本願念仏集」が成り、新古今を勅撰した後鳥羽院が法皇位に即いた。後白河法皇は清盛を大將軍とする平家一門と共に、中世という夢の浮橋に諸聖をワキ僧として、演劇した巨人であった。

後白河院の懸念に保守したものは、和歌中心の女性的な、皇室の權威・文化であった。反みやびとは、ひなび、あらび、さとびな地方的武士的文化であった。桓武平家と清和源氏は、みやびとひなびの間を右往左往して、今昔物語の内容の如き複雑な文化を形成した。後白河法皇も源氏平家と政治的に妥協しつつ、右し左し調和ある文化を創造した。その底までしみこんでいるものは仏教であった。それは彼の編纂した「梁塵秘抄」である。彼の「梁塵秘抄口伝抄」に、

上達部殿上人はいはず、京の男女、所々のたしたたもの、雑仕、江口、神崎のあそび、国々のくぐつ、上手はいはず、今様をうたふ

者のききおよび、われがつけて歌はぬ者はすくなくやあらむとある。六条橋下に住みながら、貴紳の邸宅に参入して舞い唄い、

ついに寵愛されて孕む。かかる愛染素乱の中に、今様は浸透瀰漫し、宴遊に欠がせないなつたばかりか、後白河院は、この歌唱の妙技を、「讃佛乘の因」とまで考え、子弟に伝え継ぐべき芸術的感動をもった。一天万乗の天子が、最下属の女に、師弟の礼を厚くして今様を習っている。後白河院が、山田孝雄氏の説によれば、今様の天才として愛した源資時は出家して法名を生仏と称し信濃前司行長と協力して平曲をかいたとすれば田舎で芽生えて都で育つた今様曲節が、宮廷貴族の優雅な美意識に洗練され、更に平曲と化つて、全国の田舎に謡はれて、未長く庶民を教化してきたのである。王朝の文化は、女性文化であつたが、これを武士の威張る中世に承継いでいるのが、新女性美ともいふべき、白拍子の今様の歌である。これは近世庶民演劇である浄瑠璃やお国歌舞伎まで水脈を引いている。若月保治の「人形浄瑠璃史」によれば、はじめに浄瑠璃を詠つたのも、平曲の琵琶法師であつた。かくの如き女人の文化的擡頭は、天台本覚論における平等觀の波及によるものである。天台宗の帰依宝典法華経が、古代王朝の絶大な信受をえたのは、他ならぬ女人解脱を説く經典であることが、宮廷や貴族の女性達に圧倒的に悦び迎えられたからである。中世以後の在家庶民仏教である法然・親鸞教は女人や罪深人賤民の濟度を本願とした。

芸術作品は、諸次元において対立する両極的契機の調和的統一をもつて、それ自身において完結した世界を創造するものであるが、かならずしもつねに純粹に美的な動機から発して、純美的効果を現

すにとどまらず、しばしば美的以外の意味方面において、人生と社会に対する実存的機能を發揮する。

叙事詩平家物語の英雄を語つて、平清盛と後白河法皇を除くことはできない。二人共田頂、衣、手に数珠をつまぐつているが、出家入道の実なく、清盛においては、五逆罪を犯した無慚無慚の俗悪人である。殿上の交をだに嫌はれし人清盛が、太政大臣にへあがり、桜花の爛漫たるが如く一家繁栄したことは、平家物語の巻一から巻二までに語られている。それが風の前の塵の如く滅亡したのは、清盛が染しみを極め、民間の憂れる門を知らざりし、次の如き惡逆無道の余袂である。

1 清盛は自己の權威に對抗する勢力を未然に防止するため、十五、六歳の童兒三百人を密偵に仕立て、恐怖政治を敷いた。(秀髮)

2 清盛は好色で且女にあきつぱく、祇王祇女のような白拍子を愛し、都合次第に次々に捨てて行つた。(祇王)

3 孫の資盛が摂政基房の車とすれ違つた時、下馬の礼をとらなかつたとなじられたが、清盛はこれを怨み、武力を背景に後日基房に意趣返しをさせた。(殿上の乗合)

4 鹿ヶ谷において平家倒討の密議を知つた清盛は、一味を捕縛し、酷烈な処断をした。(鹿谷)

5 重盛の死後、清盛は横暴さを一段と強め、氣にくわぬ公卿を罷免し、後白河法皇を鳥羽殿に軟禁した。(法皇被流)

6 清盛は政畧によつて、身内の子女を宮廷に入れ、わけても高倉天皇妃となつた娘の徳子に皇子(安徳天皇)が生るるや、天

皇外視として権勢の極に達した。高倉天皇が徳子以外の女性と交渉を持つことに、一々干渉し、この為小督の如きは追放の憂き目にあった。(御産・小督)

7 伝統ある京都を捨てて、福原に都を移すことを決め、これを強行した。

8 南都の僧が服従しない為、重衝を派遣して由緒深い東大・興福両寺を焼き払った。(奈良炎上)

清盛が出家の動機は、滅罪の為ではない。それは剃髮後次々に俗界の野望を満たし悪逆を増長しているからである。社会の風習に従い、社会をだまし悪事を行うに好都合の為の偽装としての円頂緇衣であったことは、平家物語卷二の重盛「教訓」の条の

さすが子ながらも、内に五戒を保って慈悲を先とし、外には五常を乱らず、礼儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を着て向はん事、さすが面はゆう辱しうや思はれけん、障子を少し引き立てて、腹巻の上に、素絹の衣をあわて著に著給ひたりけるが、胸板の金物の、少しはづれて見えけるを、かくさうと、頻に衣の胸を引き違へくぞし給へける。

が証している。それでも些かの慈悲行をし、行はんとする志もあつたろうが、何分には深い信仰がなく、煩惱熾盛にして愛欲の広海に沈没し、名利の遙山にふみこんだ男には、崇高な菩提心を貫き通すことができなかった。只彼が一門の榮福を感謝し、同時に來世の妙果を祈る為に、敵島の宝藏に納めた敵島経卷は、優美且仏陀に絶対帰依する尊嚴が現れていて崇高である。一門三十二人、各一品一卷宛、これを書写したとある。(願文)即ち「法華経」二十八品、「

無量壽」、「觀音賢」、「阿弥陀」、「般若心」等の経各一卷、これに清盛自筆の願文一卷を添えている。料紙は金銀の切箔、砂子を散らして、青、紫、紅、緑等の色彩を施し、裝飾の模様も、いちいちその趣向を改めて、額簽の金物から、軸巻卷紐の類に至るまで、実に善美を尽したものである。この優美と崇高は、感性と理性、自然的傾向と道徳的義務、美と善の調和であつて、王朝のみやびを承けて、中世のひなびに接合しているのである。これが天台教学の所謂中道であつて、世が平和であれば、清盛はこれを歴史的現実としたのであろうが、その果されざりし理想を、芸術的形象としたのが敵島経卷である。民族は民族の英雄を讚美し、理想的英雄を相像し、これを神格化して詩を作る。これが叙事詩である。かかる観点から平家物語卷六に、「清盛公は只人にはあらず、慈恵僧正の化身なり。」が肯定できるのである。今まで大和、紀州、京都に局られがちなみやびの文化が、藤原氏による平泉、源氏による鎌倉文化、平清盛による敵島文化を創始されたのが、十二世紀であつた。旅によるみやびとひなびの交流が盛になり、仏教の教義、芸術信仰が、熱烈に田舎へ移植された。かくて十二世紀を主とした旅の文芸を筆を改めて考究してみるべきである。

漂泊の歌人西行 西行出家の動機は、平家が忽ちに榮え忽ちに滅亡した十二世紀大悲劇社会人としての衝動であつた。西行には、王朝のみやびを造つた藤原氏と、鎮守府將軍としてみちのくに武威を誇つた血が混り伝っている。この男は、うたうべき運命(天才)をもつていた。これを「御鳥羽院口伝」には「生得の歌人とおぼゆ」とかかれてある。歌人とは現実を分し現実の背後、底にある形而上

のものを観じて叫ぶ人間である。それは神仏と靈交する人間である。西行は天才の仏教人であった。彼は性得の仏教人であった。出家すべき運命にあった。西行の名も浄土教から得た法名即歌人名である。十二世紀に生れたのも生得の自然であった。仏教は詩学であるという日常的普遍的真理を、西行は作歌と生活で実証した。京都東山の西行の旧跡に草庵を結んで文中元年入寂した頓所は、西行を私淑した歌人であった。その著「井蛙抄」に、

心源上人語云、文覚上人は西行をにくまれけり。其故は遍世の身とならば、一寸ぢに仏道修行外不可^二他事^一。数奇をたて、ここかしこにうそぶきありし条、にくき法師也。いづくにても見あひたらば、かしらうちわるべきよし、つねのあらましにてありけり。

の文覚が、高尾の法華会で西行に出会って、

あれは文覚にうたれんずる物のつらやうか、文覚をこそうたんずる者なれ

と、その武士としてのひなびの半面を語っている。このひなびは、定家が拉鬼体と名づけた美である。十二世紀世相人心を客観的に諦観したのが、叙事詩平家物語で、主観的に諦観したのが、抒情詩新古今集で、新古今の象徴が西行である。仏教は時間も空間も虚仮不実と説き、これを出家と、旅と、和歌と、草庵生活に現したのが西行であった。保元の義朝が生は不定死は絶対真実ということが、保元・平治・平家物語・方丈記に現実となっているのが、十二世紀であった。十二世紀の仏教的偉人は、死滅者の自覚をもって、真実に充実した生命を生きた。歌人西行はその第一人者である。ペイターは

日本文芸史論 みやびとひなび

「芸術の精神をもって生きることが、最も充実した生き方である」といった。花は散る故に美しい。人は死するが故に美しい。ゲーテは、人は臨終が最も美しいといった。鳥の死せんとするやその声よし。忠度の辞世は、

行ききれて 木の下陰を 宿とせば 花や今宵の 主ならまし
であった。西行は

願はくは 花のもとにて 春死なむ そのきさらぎの 望月のころ

積尊涅槃（入寂）の日は、二月十五日である。仏徒はこの日涅槃会を行う。これは念死の歌である。念死とは絶対死滅者の自覚である。この歌は自然の美に浸る幽玄な宗教的信念である。

西行は死滅の時の美しさをたのしく喜しく期待し、ほろびの美しさを日本人らしく爛漫たる桜花に想像したのである。西行自らの運命の象徴であると共に、総べての人間の宿業の象徴である。西行は仏道即歌道であった。これは「井蛙抄」が「数奇をたてる」といったことである。これを詳しく「西行上人談抄」に、

なほなほ行住座臥に、心を歌になすべしと侍り。昔（西行上人云）和歌は常に心すむ故に、悪念なくて、後世を思ふも、その心ですむるなりといはれし、此事、実なり。齡満六十にて、余命なしと思ひて、世を遁れて、一向浄土を求むるに、和歌好みし心にて道心を好めば、まことに心散らず、やすかりける。

とある。浄土欣求の止観的な至誠心、深心、廻行発願心、一心、淳心、相続心、別言すれば西行のいう祈り、執心、所謂純粹精神が、彼の作歌態度（もとの志）であった。この一道が彼の花の生涯であ

日本文芸史論 みやびとひなび

った。無住(一二二六—一二二二)の「沙石集」に、

西行法師遁世の後、天台、真言の大事を伝へて侍りけるを、吉水の慈鎮和尚伝ふべき由、仰せられければ、先づ和歌を御稽古候へ和歌を御心得なくば、真言の大事は御得候はじ。

「明恵上人伝記」には、

西行法師常に來りて物語して曰く、この歌即ちこれ如来の眞の形体なり。されば一首よみ出でては一体の仏像を造る思ひをなし、一句を思ひつゞけては、祕密の眞言を唱ふるに同じ。

とある。眞言とは眞実絶対のことばである。南無遍照金剛、南無阿弥陀仏である。吾妻鏡卷五文治二年八月十五日の條に、鎌倉に頼朝に引見されて歌道と弓馬の事の質問を受けた時、西行は弓馬の事は罪業の因たるに依り、心底に留め残さず、詠歌は花月に対し感動の折節僅に三十一字を作る許也。と答へ、退出に際し頼朝がくれた銀作の猫を門前の小兒に惜しげなく与へて去つたことは、彼の超俗の風格を伝えている。彼の次の歌は、

うき世にはとどめおかしと 春風の 散らすは 花を惜しむなり
けれ(山家集)

この歌は生を敬愛するが故に、死(ほろび)があるのである。生存の価値を与えるものは、死である。穢土を厭離して欣求する浄土に往生すべき為の、有限の生命であると西行は歌うているのである。

死の爲の生である。新古今を愛した宣長は、予て墓地を定めて、

山むろに 千年の春の やどしめて 風にしられぬ 花をこそ見
め

今よりは はかなき身とは なげかじな 千代の住かともとめ

えつれば

と歌っている。無常のない涅槃界に安住している。二人とも生と死を、生死即涅槃と歌道で信樂している。この歌の二人の表現の相違について、拙論親鸞と宣長——近世文芸における中世的伝統、にのべたので、ここには省略する。

西行は地位名分を捨て、妻子と別れ、一所不住、風に散る花の如く、止ることなき時間と共に、行雲、流水、一物も無き天衣無縫漂泊の歌人であった。これだけで古典的人間としての価値が十分ある。西行を生んだのは、淡白な国民性と仏教の空の信念である。西行を模倣する者は、心敬等中世の連歌人、芭蕉等の近世俳人等、人間に移動の本能がある限り、連綿と永遠に続くであろう。平曲の盲僧、霊場巡歴、廻国の聖達も、その中に混っている。

これらの廻国者が、称名念仏しつつ旅した如く西行は和歌を詠じつつ西方浄土に往生した。孤独と無常を厭欣しつつ浄土に往生した。

王朝の、花の如き享樂文化の行き詰つた中世は、その打開の道を根本的なもの、野武士的なものに求めた。記紀神話、万葉、源氏物語の回顧、本覚論による仏教の新興、神仏を習合した神道哲学の創業、俊成、定家、西行を代表とする仏道と和歌の合一、武士道の芽ばえがそれである。その影響で美意識が変化化した。西行はみやびを運んで辺土の群萌と化した。その時王朝の優雅な女性的もののはれは僧侶的崇高のはれに変質した。それは還相廻向、従果因向、下化衆生のあはれ、崇高なあはれであり、定家の有心、俊成の幽玄の一面であった。も一つの往相廻向、従同向果、上求菩提の崇高な

あはれ、有心、幽玄も同時に存在した。又、女性的なあはれ、有心幽玄も依然存在した。中世はこれら諸流の美が混合、交替期で、西行はその具体者であった。源氏物語の中世的行者であった。それは身心を放下した空の実踐者であったからである。このもののあはれの二面性は、源流源氏物語に兼備していたものであった。西行の名は平家物語には語られてない。十二世紀末の集大成である新古今集には、作者として最多数の九十首のついでいるから、西行を研究するのは、新古今集をみねばならぬ。

武蔵坊弁慶 日本文化史において、みやびとひなびの対立交流を考える時、神話の古へより、最も顕著なことは、関の東と京畿の対照である。弁慶は、その中世における象徴的人物である。

平家物語で平氏を壇の浦に追いつめ亡したのは、義経の率いる関東武士で、その勇敢な活躍が、ゆゆしく語られているが、弁慶のことは、巻九老馬に一寸書かれている丈であるが、義経記では、巻三熊野の別当乱行の事、弁慶生まるる事、弁慶山門を出る事、書写山炎上の事、弁慶洛中にて人の太刀を奪ひ取る事、弁慶義経に君臣の契物申す事、巻四土佐坊義経の訂手に上る事、義経都落の事、住吉大物二ヶ所合戦の事、巻五判官吉野山に入り給ふ事、義経吉野山を落ち給ふ事、忠信吉野山の合戦の事、吉野法師判官を追ひかけ奉る事、巻七判官北国落の事、大津次郎の事、三の口の関通り給ふ事、平泉寺御見物の事、如意の渡にて義経を弁慶打ち奉る事、直江入津にて笈探されし事、亀割山にて御産の事、継信兄弟御弔の事、秀衡が子共判官殿に謀反の事、衣川合戦の事等、全巻に亘り、影の形に添う如く、義経在る処、常に弁慶在って、苦楽を共にし、義経記は

日本文芸史論 みやびとひなび

即ち弁慶伝であるという感じがする。

儒教の君子・仏教の菩薩を兼備している。弁慶は僧の如く武士の如く波瀾万丈変幻出没自由自在にして、「御所櫻堀川夜討」に、「堀川御所に飄れなき智仁勇のそのこつがら、忠臣の鑑とは唐土の豫讓、我朝にてはその一人とよばれたる武蔵坊弁慶」

とあって、歴史の大変動期に生れた極めて振幅の広い智仁勇兼備の大人物である。この人物が、義経の忠臣として悲劇の生涯を共にしたので、「判官最負」は、弁慶に対する人氣が少からず助けになっている。又、「弁慶最負」が「判官最負」を助けている。弁慶を偉丈夫にしているのは、長刀を逆様に杖に突いて、二王立のまま死んだことと、命を惜まず義経を庇ふた忠勇である。この劇的生涯は、後人これを讚美して「能の安宅」歌舞伎十八番の「勸進帖」、「鬼一法眼三恩巻」御所櫻堀川夜討」「義経千本櫻」に演劇している。弁慶は艶聞の無い男であるが、只一つ「御所櫻堀川夜討」のみがそれも。

「怒じて勇士の戰場へおもむくときは三志とまうしてわすれること三ッあり。國をいづる時、家をわすれ、境をすぐる時妻子をわすれ、敵陣をのぞんでわが身をわする」

というにつづいて、我が娘をば義経の身代りに手討にするという王朝文芸では想像もされなかつた武士道的悲劇が作られている。荒法師の弁慶に、歌舞伎の「御所櫻堀川夜討」の、との情事は紅一点のみやびである。

後鳥羽院 嘗つて私は、みやびとひなびの比較を、関東と京都について論じたことがあつたが、ここにはみやびとひなびの対立につき史上最も苦悩した後鳥羽院について考えてみたい。後鳥羽院が苦

勞したのは、公武の合体である。公は京都の皇室、武は鎌倉の北条執権、公は古典的貴族のみやび、武は荒々しい田舎のひなびである。この二流の和合調和が美しき健全な社会であるが、承久乱はこれが分裂抗争した戦争であった。而して北条氏が勝利した事実は、新興した庶民の精神力の勝利で、後鳥羽院が流罪の隠岐で詠んだ

我こそは 新島守よ 隠岐の海の あらき浪風 ころろして吹け
限りあれば さてもたへける 身のうさを 民のわら屋に のきを並べて

とは、
おく山の おどろの下も ふみわけて 道ある世ぞと 人にしらせむ

とある和歌の道によって理世撫民を計る帝王のたけ高き気魄の敗北を、天地に向って慟哭している悲壮な叫びである。歌道の魂魄、日本の靈性の権現、有心体の英雄の体験者が、後鳥羽院であった。その懸命の聖業が新古今集であった。新古今集の詩情が承久の乱の敗北の原因である。王朝の華麗優雅、幽玄衰艶ひなびについての非客観的主我的主情が、新古今を傑作にした。そこで増鏡(つげの小櫛)に、「関の東を都の外とおとしむべくもあらざりけり。」というが如き、関東のひなびを省る寛容が足りなかったことが、後鳥羽院の悲劇の源であった。増鏡の「新島守」に、承久の乱で義時、泰時の人柄を

心を猛く思へ。おのれうち勝つものならば、再びこの足柄箱根山は超ゆべし。……かくうち出でぬるまたの日、思ひがけぬ程に、泰時鞭を挙げて馳せ来たり。父(義時)胸うち騒ぎて、「いかに」

と問ふに「計らざるに、辱く鳳凰を先だてて、御旗をあげられ、臨幸の嚴重なる事も侍らむに参りあへらば、その時の進退、いかゞ侍るべからむ。この一事を尋ね申さむとて一人馳せ侍りき」といふ。義時、とばかりうち案じて、「かしこくも問へる男かな。その事なり。まさに君の御興に向ひて、弓を引くことはいかがあらむ。さばかりの時は、兜をぬぎ弓の弦をきりて、ひとへにかしこまりて、身をまかせ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましなから、軍兵をたまはせば、命をすてて、千人が一人になるまでも戦ふべし。」と、いひも果てぬに急ぎたちにつけり。と叙している。あずまのひなびた大将ながら、みやびなる天皇を尊敬した正義の武士である。後鳥羽院が豊かな経済力に拠って華麗文華の遊樂に耽り、武家政権を否定し、古代の貴族政治の復興を意図していた時、謡曲「鉢の木」に謡れる時頼の如き辺土の民に仁政を布いた執権もいた。新古今の歌体有心の神韻を生かしたのは、北条執権の政治であった。後鳥羽院の美学の敗北の因である。

註 ①岩波新書、石母田正、平家物語 一一〇頁

②早稲田大学院文学部研究要八、福井康順・平家物語の仏教史的研究

③秦恒半・女文化の終焉 七九頁

④心昭和五十年十二月号 竹内敏雄・道徳との問題下

⑤山田昭全・平家物語の人々、三〇頁